

## CONTENTS

- 復活節特集
- 死とは何か?
- 救いの証言

2021.3  
春号

No.146

# 聖書の光

みことばは天にてとこしえに定まり

私は復活なり。  
我を信ずる者は、  
死ぬとも生きん。  
生命なり。

## 周囲の評価

「私には…がある」「私は…できる」



## 神さまの招き

創造主の真の神様は、「二羽のスズメでさえも」守り支え、「虜<sup>しらべ</sup>げられる者のために審判を行い」、私たちを愛と正義によって取り扱ってくださる御方です。どれだけ小さく、弱く、愚かであっても、神様を求めて近づく人は、救いをいただくことができます。

『我<sup>わが</sup>に来たる者は、我これを退けず』

(ヨハネ六・37)と、イエス様は大切なあなたを愛して招いておられます。

人はみな苦難と共に生きている。連日報じられる被害者数、死亡者数。それぞれの人生の悲哀・苦悩は数字には表れないもの。為政者が誇る経済指標や株価が上昇しても、民衆の平和や安泰は手に入るものではない。◇古来、武力や権力で他者を圧倒し、多くの人の血を流し、屍を踏みこえて周囲を制圧した者たちが英雄と崇められているが、果たしてそうだろうか。その國はどれだけ存続したのだろうか。◇主イエス様が治める「神の国」は、愛によって建てられた真の平和の國である。その王様は国民のために、自らの命を与えたのだ。◇主イエス・キリスト様の十字架は、その愛を明確に表している。「汝は辱<sup>ほぶ</sup>られ、その血をもて諸<sup>もろ</sup>種の族・國語・民・國の中より、人々を神のために買<sup>も</sup>い」この御方を主と仰ぐ人は、本当に幸いである。

もっと良いモノを、少しでも速く少しでも高く…と成長・進歩しているはずの世界なのに、科学が解明できない災害が起こり、医学でも対抗できない伝染病が蔓延すると、私たちは人間の限界を痛感させられます。人間の価値は? 人生の目的は? 自己の価打ちは? いま一度、問いかけて、考えてみる必要があるのでないでしょうか。

美濃ミッショントークン代表 石黒イサク

## わたしの価打ち、神さまの評価は?・

## 神さまの評価

しみや嫉妬を抱き、神様に対しても恨みや怒りを持つしまう人たちもあるでしょう。さらに悲觀・失望のあまり、自らの命を絶つてしまう人まであるのは、実に気の毒で悲しいことです。

## 燭台



## 復活節の特徴と意味

新約聖書が書かれたギリシャ語では「パスカ」と呼びますが、それはヘブル語で「過

越」を現す「ペサハ」から来ていて、主イエス・キリスト様の十字架は、過越の祭りの成就であったことを示しています。『「われらの主イエス・キリスト様の復活記念日を祝ひ」とは、初代教会の時代から行わっていました。十字架がユダヤ暦二サンの月14日でしたから、その三日目が復活日となります。

## 復活節の日

世界中で祝われる降誕節＝クリスマスは、12月25日に固定されていますが、復活節は毎年移動します。それは太陰暦と太陽暦の差によって生じるもので、主イエス・キリスト様は過越の祭りの時に十字架にかかり、三日目に復活されましたので、過越の次の日曜日が復活日になります。現在は春分の日の後に来る最初の満月の次の日曜日が復活節となります。（教派によって基準日が違います）

主イエス・キリスト様の復活記念日を祝ひ」とは、初代教会の時代から行わっていました。十字架がユダヤ暦二サンの月14日でしたから、その三日目が復活日となります。

# 復活節特集

## 復活節と行事について



越』を現す「ペサハ」から来ていて、主イエス・キリスト様の十字架は、過越の祭りの成就であったことを示しています。『「われらの主イエス・キリスト既に磨られ給えり。』（コリント前書五・7）イスラエル民族は、出エジプトを記念する『過越の祭り』を春の例祭として祝つてきました。

しかし復活祭を表す英語「イースター

（Easter）」およびドイツ語「オースターバン（Ostern）」は、なんとゲルマン神話の春の女神「エオストレ（Eostre）」の名前で、女神の祭りの呼称でもあります。ゲルマン人は春の月名を「エオストレモナト（Eostremonat）」と呼び、春の到来を祝う祭りを行つていました。つまり異教の春祭りと、主イエス様の復活の祝いが融合して、そのような呼び方になつてしまつたのです。

キリスト者にとって最も大切な復活日を祝いを、異教の女神の名で呼び続けることなど、看過できないことです。復活節という呼称を保持したいものです。

## 諸習慣の内容



復活節前の四週間をレント＝四旬節、あるいは大斎節（たいさいせつ）といいます。正教会では、大斎（おおものいみ）として六

## イースター・エッグ

これは広く東西ヨーロッパで用いられていました。復活祭に出される、彩色や装飾を施されたゆで卵で、配布されたり、子どもたちがそれを探したりして遊びます。ただしこれも聖書的根拠は無く、春の女神の象徴だった卵に、「見た目は動かない卵から命が生まれるから、復活の象徴で、赤色の装饰はイエス様の血の色だ」と取つて付けたような説明をしています。

古代から世界各地で春分の日頃に、春

めに死に、また葬られ、聖書に応じて三日目に甦り。』（コリント前書一・5・3・4）

『キリスト聖書に応じて、我らの罪のた

めに死に、また葬られ、聖書に応じて三日目に甦り。』（コリント前書一・5・3・4）

復活節の諸行事や食べ物などが、キリスト教の習慣として日本に入つてきています。

しかしクリスマスのサンタクロースなどと同様に、商売と欧米の異教・因習が混合さ

れてしまつたところもたくさんあります。

私たちは聖書に基づいて、守るべきもの

を守り、警戒すること、排除すべきものは

何であるかを見極める必要があります。

## イースター・バー

これはまた女神の化身で、ウサギは多産であるから、豊穰の神の象徴として用いらされた偶像ですので、大切な記念日に偶像を持ち込むことは許容すべきではありません。これもイエス様の復活とは無関係なもので、排除すべきものであります。



# 死とは何か？

生あるものは必ず死にます。“恐怖の王”と呼ばれて恐れられ、嫌がられている“死”ですが、すべての人が絶対に避けて通れない、人類にとって最大の敵・最重要問題であります。医学的な死の特定や、法律的扱いではなくて、聖書が示す“死”について調べてみましょう。聖書は、死とは「いのちから切り離されること“分離”」であると教えています。普通では死とは、肉体の死を指しますが、聖書は明確に、靈的死、肉体的死、第二の死の三つの死があり、それぞれがつながっていることを説いています。

## 靈的な死＝神との分離

『善惡を知るの樹は、汝その果を食らうべからず、汝之を食らう日には、必ず死ぬべければなり』（創世記 2:17）と神さまはハッキリと警告されましたが、人類の始祖アダムが、創造主である神様に背いた時に、神さまから切り離される“靈的死”的状態になりました。

アダムはそれから約900年も生きて、多くの子孫を残しましたが、人類は命の源である神さまとの交わりが断たれた状態＝罪人となってしまいました。それはすべての人に共通で、靈的に死んでいる者は、やがて必ず肉体的な死を迎えます。

『それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り。』  
（ロマ書 5:12）



## 肉体的死＝肉体と靈魂の分離



人間は“靈”と“心”と“体”的三つでできています。私たちの身体は土の塵から造られていますので、死ぬ時に土に戻り、内面にある“靈”と“心＝魂”は肉体から分離し、靈魂は死者の行き先である陰府に行きます。これが“第一の死”です。靈魂は永遠の存在で、人生は一度限り、輪廻転生も幽霊もありません。

『凡ての人罪を犯しし故に、死は凡ての人に及べり。』（ロマ書 5:12）  
『一度死ぬことと、死にてのち審判を受くることとの人に定まり』  
（ヘブル書 9:27）

## 第二の死＝神との永遠の分離

陰府に入れられていた靈魂は、世の終わりに正義の神様の御前で、一生涯の罪を裁かれます。そして永遠の刑罰に入れられて、神さまから永遠に分離されることを“第二の死”と呼びます。ここに入ったら最後、永遠に出ることはできません。地獄とも呼ばれる第二の死は、悪魔とその手下たちのために設けられた所でしたが、救いを受けとらなかった罪人たちも、そこに行くことになります。主イエス様の十字架の死は、私たちが罪の赦しをいただいて、絶対にそこに行かないためがありました。

『此の火の池は第二の死なり。すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられ』（黙示録 20・14-15）

死と死後の世界も事実・真実ですから、一人一人が絶対に対応しなければならない、人生の最重要課題です。主イエス様は『人、全世界を儲くとも、己が生命を損せば何の益あらん。…その生命の代に何を与えるや。』（マタイ 16:26）とお語りになり、この世の成功以上に、救いの重要性をお示しになりました。救いを受ける時に、私たちの靈は生かされ、神さまとの交わりが回復されます。永遠のいのちとは、二度と神さまと切り離されることの無い状態で、永続します。

『罪の払う値は死なり。然れど神の賜物は、我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。』  
（ロマ書 6:23）

